

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月25日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20529005

研究課題名（和文）：幕末京坂文壇の諸相解明—台湾大学「長沢文庫」・東京大学「本居文庫」調査を中心に—

研究課題名（英文）：The elucidations of Kyoto and Osaka literary in the end of Edo period

研究代表者

亀井 森 (KAMEI SHIN)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：40509816

研究成果の概要（和文）：

研究目的および研究計画に従い、台湾大学長沢文庫および東京大学本居文庫の調査を行った。これによって多くの新見を得ることができ論文・学会発表として報告した。本研究により長沢伴雄の伝記研究は飛躍的に進み、資料集として長沢伴雄歌文集を刊行することができた。また同時代のデータベースとして多くの材料を得、今後の研究へ進展が可能となった。なお本研究の成果が認められ平成21年9月に九州大学より博士号（Ph.D、文学）取得し、平成22年10月鹿児島大学教育学部へ採用された。

研究成果の概要（英文）：

In accordance with the plan for research purposes and research, I investigated Nagasawa collection in the Taiwan National University and Motoori collection in the University of Tokyo. I reported as papers and conference presentations. And was able to study biography of Nagasawa Tomoo proceeds exponentially by the present study, to publish the research data of Tomoo Nagasawa. And get a lot of material as the database of the same period, it became possible to study the progress of the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	0	1,000,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	720,000	4,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学・近世文学

キーワード：国学・和歌・長沢伴雄・台湾大学

1. 研究開始当初の背景

応募者は近世後期に隆盛を見た国学の実態
解明を修士課程より一貫して研究対象とし

てきた。依然として断絶して捉えられている
近世と近代を一連の流れの中で捉え直そう
とする視座において、従来の近世和歌・国学

史に取り残されてきた地方の国学者などの諸相を指摘した。

本研究は上記の研究成果を発展させる方向で、旧帝大時代の台湾に遺存された幕末の国学者長沢伴雄の旧蔵書群を用いた研究を計画した。ところが近世後期の京坂文壇の一つの軸として捉えられる人物でありながら、自筆日記や自筆稿本類がこのように戦前に台湾へ移管されたため、戦前戦後を通じて国内の研究者による研究はほとんど進展を見ることがなかったのである。

2. 研究の目的

本研究は、旧帝国大学時代に台湾に流出し戦後も現地に遺存した幕末の国学者長沢伴雄（ながさわともお）の膨大な旧蔵書の1点1点の精査を行なう。それを行うことで、幕末の和歌壇の一翼を担った長沢伴雄の伝記を明らかにし、国内の資料によってのみ構築された傾向が否めない国学史を是正し幕末期の京坂の文壇像を再構築することを目的とする。

(1) 目的を達成するために以下の2つの柱を考えた。

①台湾大学図書館「長沢文庫」収蔵 長沢伴雄自筆草稿・稿本の調査

本研究では研究期間を4年に設定し、485点1073冊に及ぶ「長沢文庫」の中から長沢伴雄の伝記・文事に関するものを中心に精査を行ない、ほとんど解明されていない伝記・事蹟をデータベース化して明らかにする。そしてその成果と次に掲げる国内資料による研究と合わせ、幕末における情報収集・伝達の諸相、国学者のネットワークにも調査を広げる。

②東京大学国文学研究室蔵「本居文庫」における長沢伴雄関係資料の調査

「本居文庫」とは本居宣長以降、本居家に脈々と受け継がれてきた蔵書群（約3500点）である。長沢伴雄は宣長の養子であった本居大平を師とする鈴屋系統の国学者である。当然のことながら、大平や同門の国学者らとの歌会資料・添削資料中に長沢伴雄も頻出する。本研究では「本居文庫」から長沢伴雄関係の事跡を抽出し、上記1のデータベースに組み込む。「本居文庫」はすでに国文学研究資料館（立川市）においてマイクロフィルムが公開されており、点数は多いが期間内に調査は可能である。

(2) 学術的な特色・独創的な点および予想される結果と意義

①〈なぜ長沢文庫と本居文庫に注目するのか〉

まず長沢伴雄の旧蔵書は日本国内ではほとんど見ることはできない。また「長沢文庫」のように一人の国学者の文庫がまとまった形で残されているのは、国内でも「本居文庫」

に次ぐ規模といえる。中でも和歌・国学に関する書籍には、全編にわたって伴雄自筆の書き入れがあり当時の和歌・国学観を窺い知ることができる資料である。国内の自筆稿本資料の研究が進む中で、海外に遺存するこれらの稿本群は極めて有効な資料価値を有しており、これを究明することによって幕末京都・大阪の情報・人物交流、和歌・国学の二面を明らかにできる、他には得られない条件を持っている。

さらにこれら二つの大きな文庫を長沢伴雄という共通の切り口で捉えた時、そこには二つの面が見える。一つは「長沢文庫」に残る長沢伴雄の直接的・主体的な文事であり、もう一つは「本居文庫」に見られる、同時代の国学者たちの文事の中に顕れる長沢伴雄の姿である。いわば長沢伴雄の伝記研究において二つの文庫の調査は車輪の両輪のような関係にあり、「本居文庫」の調査は一種のバランスシートまたは「長沢文庫」を補完する役割を果たしている。これによって長沢伴雄研究のみならず、ひいては幕末京坂の文壇の諸相をより客観的な姿で再構築することが可能になると考える。

②〈台湾大学との信頼関係〉

応募者は、数年前に九州大学が行った台湾大学所蔵の日本古典籍の調査に参加した経験があり、また平成16年度より個人的に長沢文庫の調査を行ってきた。その一つの成果として、2008年6月末には『長沢伴雄歌文集 絡石の落葉』を台湾大学出版中心（出版会）から刊行することが決まっている。以上の様な経緯から、調査開始段階における台湾大学との調査内容説明あるいは信頼構築等の交渉は問題なく、早急に調査を開始することが可能である。

3. 研究の方法

台湾大学蔵「長沢文庫」を精査し、識語・書入等をデータベース化する。さらに本居家の蔵書である「本居文庫」（東京大学国文学研究室蔵）を補助資料として据え、その中から長沢伴雄関係の記述を抽出して同時代での長沢伴雄の文事を客観的に捉える。近世を代表するこれらの国学者の文庫調査によって、長沢伴雄を一つの軸とした京坂の和歌・国学壇の諸相を解明することが可能となる。調査によって得られた新見・新資料を報告、論文化し、新しい視座を内外の研究者に公表する。

上記の研究目的を達成するために具体的に3つの柱を考えた。

(1) 台湾大学「長沢文庫」調査

「長沢文庫」485点の調査を第1期・2期に分け、まず第1期として長沢伴雄自筆稿本257点の精査を行う。特に天保から弘化年間（1830-1847）の15年にわたる長沢伴雄の自筆日記群は幕末京坂の文壇を見通すことのできる資料であるので重点的に調査

する。第2期として自筆以外の典籍への書入・識語を採録し、人物交流関係などの詳細な情報のデータベース化を試みる。

調査は年間2回（7泊8日）行い応募者単独で行う。しかしながら計画通りに調査が進行しないと判断した場合には、吉良史明（韓国・啓明大学客員教授）に海外研究協力者として、また菱岡憲司（九州大学大学院生）にも研究協力者兼通訳として参加してもらうことも視野に入れている。

また「長沢文庫」を管理する台湾大学図書館特蔵組（貴重書庫部門）では資料保存の観点からデジタルカメラ・マイクロフィルム・ゼロックスコピーなどの撮影・複写を許可しておらず、資料はすべてその場で書写しなければならない。本研究では資料によっては1冊全文の書写となる場合もあり調査には時間がかかる。そのため現地調査はできれば数多く長時間行いたいと考えている。外国旅費は台北滞在・往復旅費などを主な必要経費として計上する。

（2）東京大学「本居文庫」調査（於 国文学研究資料館）

「研究目的」(1)－②で示したように、「本居文庫」は長沢伴雄の伝記研究において不可欠の資料群である。特に師である本居大平が関わった著作・歌会資料147点、およびその子本居内遠（うちとお）関係資料137点には長沢伴雄の名が頻りに登場する。まずこの284点を調査し、その後、時期・人物関係等を考慮して適宜調査を進める。

先述したように「本居文庫」はマイクロフィルム化されており、主な作業は国文学研究資料館で行い、難読箇所・不鮮明な箇所は東京大学国文学研究室にて原本確認を行う。調査は年間4回（20年度は2回）で1回の調査に3泊4日程度を費やす予定である。国内旅費は東京滞在・往復旅費などを主な必要経費として計上する。また重要度に応じてマイクロフィルムを紙焼する必要がある。紙焼複写料金（1枚40円）を必要経費（消耗品費）として計上する。

（3）その他の国内調査

京都・大阪・和歌山を中心とした資料収集・実地踏査を必要に応じて行う。関西以外では、長沢伴雄と親交のあった若狭小浜の伴信友（ばんのぶとも）関係資料（小浜市立図書館酒井家文庫）の調査・閲覧を行う。ここで得られた資料と上記①②で作成したデータベースとを合わせることで、重層的・相互補完的な成果が期待できると考える。申請者が福岡在住のため、関西・北陸方面への滞在費・往復旅費を必要経費として計上する。

〈20年度の研究計画・方法〉

平成20年度は（1）「長沢文庫」調査第1

期257点の調査から開始する。台湾大学での調査日程は9月と1月の2回を予定している。不測の事態から止むを得ず調査が行えなかった場合は、福岡大学高橋昌彦准教授の調査チーム（平成19年度科学研究費基盤研究(B)「旧台北帝大に遺存する国学者・長沢伴雄の旧蔵書に関する総合的研究」, 課題番号19401016)が作成中の目録カードを利用して、国内でのデータベース補完に努める。応募者は高橋昌彦准教授の調査にも連携研究者として参加しているが、あくまでも目録作成であり、さらに踏み込んだ本研究とは性格が異なる。

（2）「本居文庫」の調査について本居大平関係資料147点の調査から行う。国文学研究資料館での調査は10月と12月の2回を予定している。

〈平成21年度以降の研究計画・方法〉

平成20年度から行っている（1）（2）の調査を継続して行う。（1）は第2期調査へ移行するが、先述したように進捗が遅れている場合には2名を調査に同行させ調査補助に従事してもらう。（2）についても内遠関係資料137点を調査し、進捗が遅れている場合は（1）と同様の処置をとる。

平成21年度以降に（3）「その他の国内調査」を実施し、「長沢文庫」「本居文庫」以外の資料をデータベースに追加・解析する。前述の小浜市立図書館の他、本居宣長記念館（三重県松阪市）所蔵の大平・内遠関係資料についても調査を行う予定である。

4. 研究成果

研究目的および研究計画に従い、台湾大学長沢文庫および東京大学本居文庫の調査を行った。これによって多くの新見を得ることができ論文・学会発表として報告した。本研究により長沢伴雄の伝記研究は飛躍的に進み、資料集として長沢伴雄歌文集を刊行することができた。また同時代のデータベースとして多くの材料を得、今後の研究へ進展が可能となった。なお本研究の成果が認められ平成21年9月に九州大学より博士号（Ph. D、文学）取得し、平成22年10月鹿児島大学教育学部へ採用された。

具体的には平成20年に台湾大学図書館出版中心より刊行した単著『長沢伴雄歌文集 絡石の落葉』（亀井森編、総ページ数729ページ、台湾大学典蔵全文刊本1、平成20(2008)年7月）は研究対象として位置づけた紀州藩国学者長沢伴雄の歌文集であり、以後長沢伴雄研究の基礎資料となり得る資料集である。長沢伴雄のみならず同時代の研究者・文人達の文芸や動向が窺える資料として有効である。

さらに長沢文庫の調査から得られた材料を元に作成した論文(単著)、亀井森「近世後期類題和歌集編纂の一齣」(「近世文芸」第90号, pp. 30-43, 日本近世文学会, 平成21(2009)年7月)は従来ほとんど研究の進んでいなかった近世後期の類題和歌集の研究を進めて、類題集研究の基礎的論文として機能している。

本研究の成果として今後刊行が決定している以下2つの論文によって従来等閑視されてきた問題を取り上げている。

・亀井森「紀州藩蔵書形成の一側面―伴信友と長沢伴雄の邂逅―」(「アジア遊学」6月号掲載予定, 勉誠出版, 平成24(2012)年6月)

・亀井森「近世後期『枕草子』研究一斑」(「雅俗」第11号掲載予定, 雅俗の会, 平成24(2012)年6月)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 亀井森「近世後期『枕草子』研究一斑」(「雅俗」第11号, pp. 1-15, 雅俗の会, 平成24(2012)年6月) 査読○

2. 亀井森「紀州藩蔵書形成の一側面―伴信友と長沢伴雄の邂逅―」(「アジア遊学」6月号, pp. 2-11, 勉誠出版, 平成24(2012)年6月) 査読○

3. 亀井森「〈翻刻〉安東省庵著『保元物語評』(九州歴史資料館分館 柳川古文書館編『省庵集 翻刻編』掲載予定, 平成24(2012)年5月刊行予定) 査読×

4. 亀井森「佐賀大学蔵今泉蟹守関係資料」(「研究紀要」第4号, pp. 59-79, 佐賀大学地域学歴史文化研究センター, 平成22(2010)年3月) 査読×

5. 亀井森「近世後期類題和歌集編纂の一齣」(「近世文芸」第90号, pp. 30-43, 日本近世文学会, 平成21(2009)年7月) 査読○

6. 亀井森「翻刻資料 大成経破文答釈ノ積答」(『黄檗僧と鍋島家の人々―小城の潮音・梅嶺の活躍』図録 pp. 90-99, 佐賀大学地域学歴史文化研究センター, 平成20(2008)年10月) 査読×

[学会発表] (計4件)

1. 亀井森「近世後期『枕草子』研究一斑」(平成22年度九州大学国語国文学会 於九州大学, 平成22(2010)年6月6日)

2. 亀井森「台湾大学長澤文庫の意義と有用性について」(台大図書館蔵日本文線装書之研究価値講演会 於国立台湾大学, 平成22(2010)年3月22日)

3. 亀井森「近世後期における『枕草子』研究の一齣」(第19回古典研究会 於福岡大学, 平成21(2009)年11月28日)

4. 亀井森「絵巻はなぜ模写されたのか―『春日権現験記絵巻』模写の風景―」(和歌山市立博物館秋季特別展「岩瀬広隆―知られざる紀州の大和絵師―」講演 於和歌山市立博物館, 平成20(2008)年11月1日)

[図書] (計1件)

亀井森『長沢伴雄歌文集 絡石の落葉』(紀州藩国学者長沢伴雄資料集、亀井森編、3冊729ページ、台湾大学典蔵全文刊本1、国立台湾大学図書館、平成20(2008)年7月)

[その他]

ホームページ等

研究成果の公表について、近世文学関係の学会・研究雑誌等に研究成果を発表することはもとより、一般社会に広く公表することを目的として応募者が作成している研究報告ブログ「近世後期文壇研究階梯」

(<http://kasasagi0629.blog74.fc2.com/>)において調査の途中経過および調査によって得られた新見を公表する。

2012年4月25日現在で17887回閲覧ビューを教え、学界内外に本研究の詳細を報告し研究の社会への還元を行っている。

6. 研究組織

(1) 研究代表者 亀井森 (KAMEI SHIN)
鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号: 40509816